國語尊重

伊東忠太

青空文庫

一　國語は國民の神聖なる徽章

元來わが日本語は甚だ複雑なる歴史を有する。大體に於てその大部分は太古より傳來せる日本固有の言語及び漢語をそのまゝ取り入れたもの、またはこれを日本化したもので、一部は西洋各國例へば英、佛、和、獨、西、葡等の諸國の語から轉訛したもの、及び梵語系その他のものも多少ある。

近來世界の文運が急激に進展したのと、國際的交渉が忙しくなつたので、わが國においても舊來の言語だけでは間に合はなくなつた。

殊に新しい專門的術語はおほくは日本化することが困難でもあり、また不可能なのもあるので便宜上外語をそのまゝ日本語として使用してゐるのが澤山あるが、勿論これは當然のことで、少しも差支はないのである。

併しながら、永くわが國に慣用された歴史のある我國語は、充分にこれを尊重せねばならぬ。

國語は國民思想の交換、聯絡、結合の機關で、國民の神聖なる徽章でもあり、至寶でもある。

不足な點は適當に外語を以て補充するのは差し支へないが、ゆゑなく舊來の成語を捨てゝ外國語を濫用するのは、即ち自らおのれを侮辱するもので、以ての外の妄擧である。なかんづく

一國民の有する固有名は最も神聖なもので、妄りに他から侵されてはならぬ。曾て寺内内閣の議會で、藏原代議士が總理大臣から「ゾーバラ君」と呼ばれて承知せず、「これ猶ほ寺内をジナイと呼ぶが如し」と抗辯して一場の紛議を醸したことがあつた。

これは一時の笑話に過ぎぬが、こゝに看過し難きは、わが日本の稱呼である。わが國名は「ニホン」または「ニツポン」である。外人は思ひ〳〵に勝手な稱呼を用ゐてゐるが、それは外人の自由である。

併しわが日本人が外人等に追從して自ら自國の名を二三にするのは奇怪千萬である。英米人の前には「ジヤパン」と稱し、佛人に逢へば「ジヤポン」と唱へ、獨人に對しては「ヤパン」といふは何たる陋態ぞや。

吾人は日常英國を、「イギリス」、獨國を「ドイツ」と呼ぶが、英獨人は吾人に對して自ら爾く呼ばないではないか。

日本人中には今日でもなほ外人に對して臺灣を「フオルモサ」、樺太を「サガレン」、朝鮮を「コレア」旅順を「ボート・アーサー」、京城を「シウル」新高山を「マウント・モリソン」などといふ者があるのは不都合である。

露國でさへ、曾てその首府のペテルスブルグは外國語であるとて、これを自國語のペテログラードに改名したではないか。

二　母語の輕侮は國民的自殺

日本固有の地名を外國になぞらへて呼ぶことも國辱である。

例へば、曾て日本を「東洋の英國」などとほこり顔になへたことがある。飛騨と信濃の境を走る峻嶺を「日本アルプス」などと得意顔に唱へ、甚だしきは木曾川を「日本ライン」といひ、更に甚だしきは、その或地點を「日本ローレライ」などといったものがある。

この筆法で行けば、富士山を「日本チンボラソ」と呼び、隅田川を「日本テムズ」とでもいはねばなるまい。

日本古來の地名を、郡町村等の改廢と共に變更することは、或場合にはやむを得ないが、古の地名に古の音便によつて當て嵌められた漢字を妄りに今の音に改讀せしめ、その結果地名の改稱となるが如きは甚だ不用意なことである。

例へば山城の「サガラ」は最もこれに近い音を有する相●（サング）樂●（ラー）の二字によつてあらはされたのが、今は「ソーラク」と讀ませてをり、能登の「ワゲシ」は最もこれに近い音を有する鳳（フング）至（シ）の二字によつて示されたのが、今は「ホーシ」と讀む者がある。

その他伊賀のアベ（阿拜）は「アハイ」となり信濃のツカマ（筑摩）は「チクマ」となつたやうな例はなほ若干ある。

この筆法で行けば、武藏は「ブゾー」、相模は「ソーボ」と改稱されねばならぬ筈である。尤も、古の和名に漢字を充當したのが、漢音の讀み方の變化に伴なうて、和名が改變せられ

た例は、古代から澤山ある。

例へば、平安京の大内裡の十二門の名の如きで、その二三を擧ぐればミブ門、ヤマ門、タケ門は、美福門、陽明門、待賢門と書かれて、つひにビフク門、ヨーメイ門、タイケン門となつたやうなものである。

和名に漢字の和訓を充當したものが●●、理由なく誤訓された惡例も可なりある。

例へば、羽前の「オイダミ」に置賜の文字を充當したのが、今は「オキタマ」と誤訓されてゐる。

この外、古の地名を、理由なく改廢した惡例も澤山ある。

例へば、淡路と和泉の間の海は、古來茅渟の海と稱し來たつたのを、今日はこの名稱を呼ばないで和泉洋または大阪灣と稱してゐる。

尤も「チヌノウミ」は元來和泉の南部のチヌといふ所の沖を稱したのではあるが・・・。

また有名なる九州の有明灣を理由なしに改竄して島原灣などとゝなへてゐるものもある。

三　外語濫用からパパ樣ママ樣

以上日本の固有名、殊に地名について、その理由なく改惡されることの非なるを述べたが、ここに更に寒心すべきは、吾人の日用語が、適當の理由なくして漫然歐米化されつゝあるの事實である。

●●●

これは吾人が日々の會話や新聞などにも無數に發見するが、例へば、近ごろ何々日といふ代

はりに何々デーといふ惡習が一部に行はれてゐる。

●●●●

わざ〳〵デーといはずとも、日といふ美しい簡單な古來の和語があるのである。

●●

また例へば、父母はとと樣、はは樣と呼んで少しも差し支へなきのみならず、却て恩愛の情が籠るのに、何を苦んでかパパ樣、ママ樣と、歐米に模倣させてゐるものが往々ある。

外國語を譯して日本語とするのは勿論結構であるが、その譯が適當でなかつたり、拙劣であつたり不都合なものが隨分多い、新たに日本語を作るのであるから、これは充分に考究してもらひたいものである。

●●●●

劣惡なる新日本語の一例に活動寫眞といふのがある。

これはキネマトグラフの譯であらうが、何といふ惡譯であらう。支那はさすがに文字の國で、これを影戲と譯してゐるが、實に輕妙である。

●●

文章の章句においても往々生硬な惡譯があつて、甚だしきは何の事やら分からぬのがある。「注意を拂ふ」だの「近き將來」などは、おかしいけれどもまだ意味が分かるが、妙に持つてまはつて、意味が通じないのは、まことに困まる。

これ等は日本語を蹂躙するものといふべきである。

ひるがへつて歐米を見れば、さすがに母語は飽くまでもこれを尊重し、英米の如きは至るところに母語を振りまはしてゐるのである。

ドイツでも曾てラテン系の言葉を節制してなるべく、自國語を使用することを奬勵した。

どれだけ勵行されたかは知らぬが、その意氣は壯とすべきである。

四　漫然たる外語崇拜の結果

我輩が曾てトルコに遊んだ時、その宮廷の常用語が自國語でなくして佛語であつたのを見ておどろいた。

宮中の官吏が互に佛語で話してゐるのを見てトルコの滅亡遠からずと直感したのである。

インドにおいては、地理歷史の關係から、北部と南部とでは根本から言語がちがふので、インド人同士で英語を以て會話を試みてゐるのを見てインドが到底獨立し得ざるゆゑんを悟つた。

昔支那において塞外の鮮卑族の一種なる拓拔氏は中國に侵入し、黃河流域の全部を占領して國を魏と稱したが、魏は漢民族の文化に溺惑して、自ら自國の風俗慣習をあらため、胡語を禁じ、胡服を禁じ、姓名を漢式にした。

果然彼れは幾ばくもなくして漢族のために亡ぼされた。獨り拓拔氏のみならず支那塞外の蠻族は概ねその轍を履んでゐる。

わが日本民族は靈智靈能を有つてゐる。炳乎たる獨特の文化を有してゐる。素より拓拔氏や印度人やトルコ人の比ではない。

宜しく自國の言語を尊重して飽くまでこれを徹底せしむるの覺悟がなければならぬ。

然るに今日の狀態は如何であるか、外語研究の旺盛はまことに結構であるが、一轉して漫然

たる外語崇拝となり、母語の輕侮となり、理由なくして母語を捨て、妄りに外語を濫用して得意とするの風が、一日は一日より甚だしきに至つては、その結果は如何であらう。これ一種の國民的自殺である。

切に希ふ所は、わが七千餘萬の同胞は、亘に相警めて、飽くまでわが國語を尊重することである。

若し英米覇を稱すれば、靡然として英米に走り、獨國勢力を獲れば翕然として獨國に就き、佛國優位を占むれば、倉皇として佛に從ふならば、わが獨立の體面は何處にありや。

人或ひはわが輩のこの意見を以て、つまらぬ些事に拘泥するものとし或ひは時勢に通ぜざる固陋の僻見とするものあらば、わが輩は甘んじてその譏を受けたい。そして謹んでその教へを受けたい。

（完）

（大正十四年一月「東京日々新聞」）

青空文庫情報

底本：「木片集」萬里閣書房
　1928（昭和3）年5月28日発行
　1928（昭和3）年6月10日4版
初出：「東京日日新聞」
　1925（大正14）年1月
入力：鈴木厚司
校正：しだひろし
2007年11月22日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

國語尊重

伊東忠太

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/